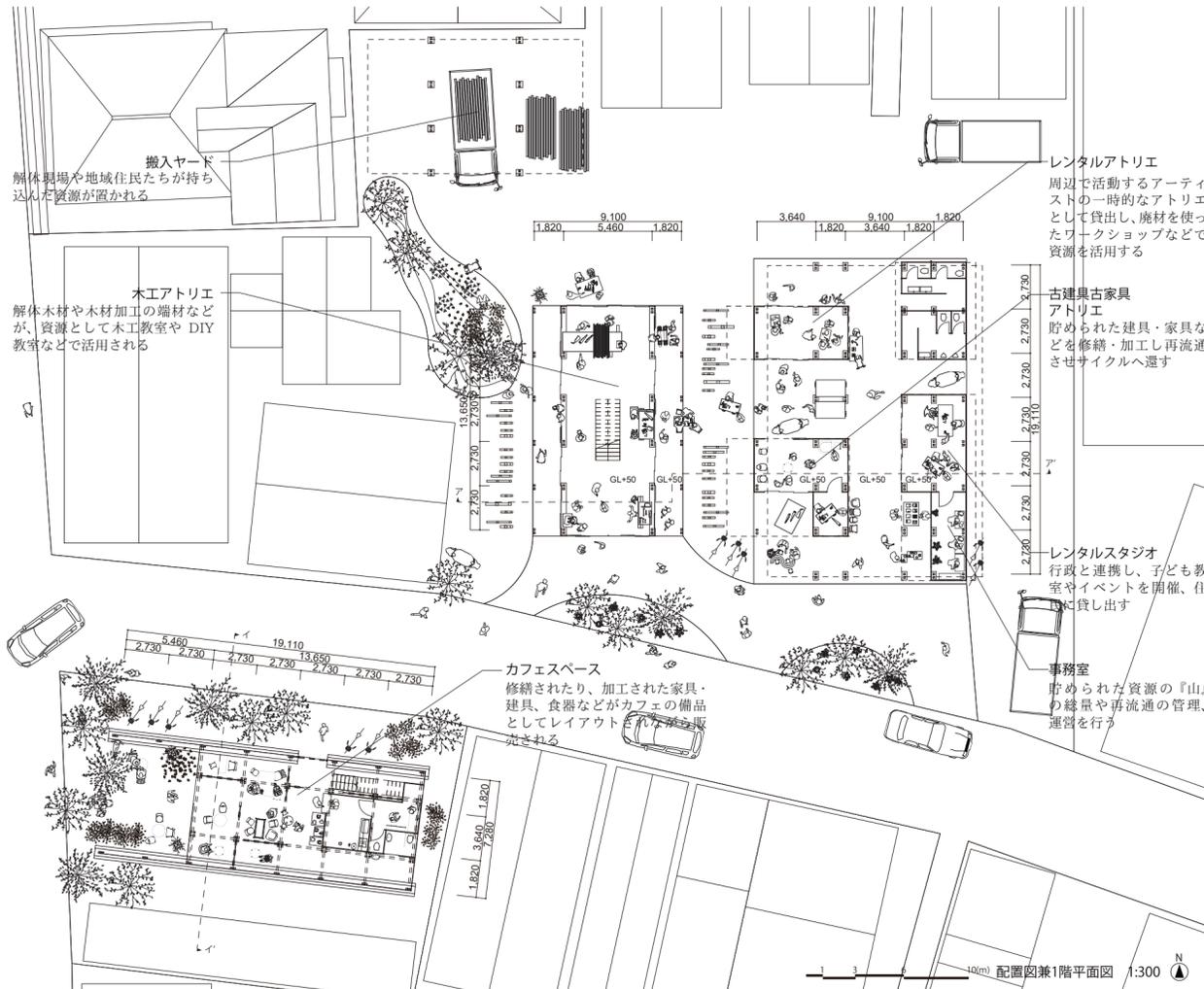


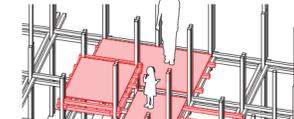
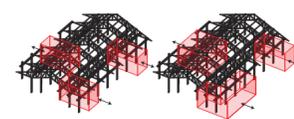
# 都市の『山』を貯める

生態学における「発酵」を概念的に読み解き、建築に置き換えることで、建築における資源性を探る。「発酵」を建築的に読み替えた「建築の『発酵』」の概念をもとに、既存建築の空間や建築物の解体後の木材の資源性を考慮した構法を提案する。京都市北区の一面を対象敷地とし、「建築サイクル」の可能性を、実証し、新たな価値の再分配を行うきっかけとなる地域の拠点として計画し、まちや人々と建築のより良い関係を築き、これからの新しい世界の生まれる場として提案する。



建築サイクルの仕掛け

建築の『発酵』の仕掛け



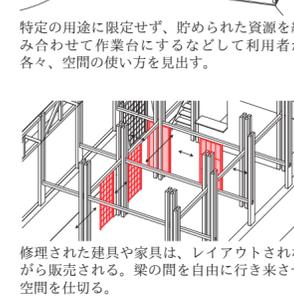
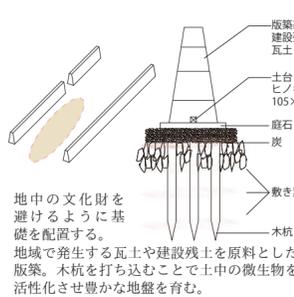
レンタルスペースではその時々によって異なるサイズのレンタルルームが構造に寄生するように挿入される。

2階部分では木材を差し込んだり、乗せたり、新たにはさむことで空間を増減しながら資源を貯めて利用する。



解体時には採っていた木材同士を分解していくことでモジュールのそろう材が採れることで、解体後の都市の『山』となる。

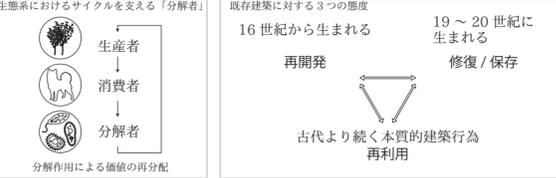
特定の用途に限定せず、貯められた資源を組み合わせて作業台にするなどして利用者が各々、空間の使い方を発見する。



## 00. はじめに：腐敗と発酵

牛乳がヨーグルトになるように、大豆が味噌や納豆になるように、人に有用なものへと「発酵」させることで価値を見出してきた。「発酵」とは、生態学で「分解者」と呼ばれる微生物の生命活動による副産物で、無価値と判断されたものを価値のあるものとして再び物質のサイクルに還す、「分解者」による価値や可能性の再分配である。

日本には古くから多くの木造建築が作られてきた。それらは、木材資源を保管している都市の『山』と考えることもできる。しかし、大半の解体材が産業廃棄物として単一的に処理されることで、本質的行為であるとされる建築の「再利用」はなされることなく、まだ価値や可能性を残した資源としての都市の『山』が取り壊され「腐敗」していると考えられる。



## 02. 調査：都市の『山』と建築サイクルの可能性

これまでになされてきた「建築行為」の歴史を振り返り、建築を創造する過程でどのような資源が着目され建築やモノのサイクルが起こっていたのかを3つの視点から調査し考察する。

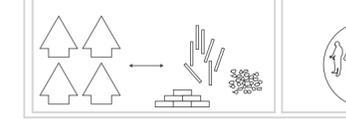
### 02-1. 建築史の視点からの再利用による建築サイクル

多様な使われ方を許容する空間のつくりかた、分解可能な構法の提案の必要性



### 02-2. ヴァナキュラーにおける建築サイクル

資源に対するアクセスの容易性と生活との密接性による材料選び



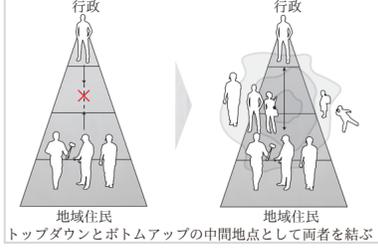
### 02-3. 江戸時代におけるモノのサイクル

モジュール統一の重要性



## 03. 敷地：京都市北区紫野

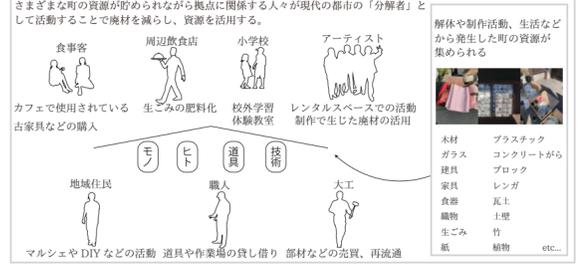
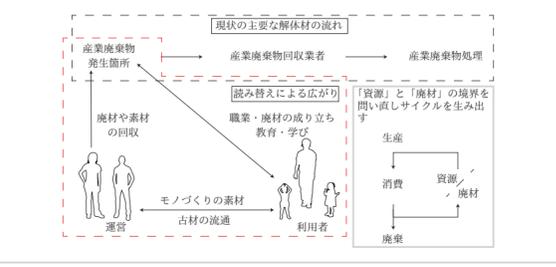
設計対象敷地とする京都市北区紫野は、近年、区としてもモノや資源サイクルの取り組みに対して前向きな姿勢を見せている。また地域住民間での地域活動の発足や、活動の中心を担うアーティストや移住者が増加傾向にあり、そこでも資源のサイクルに関心が持たれている。一方で、お互いに同じ方向を向いているが活動がうまく連動できていないなどの問題も抱えている。トップダウンによる政策とボトムアップによる活動をつなぎ合わせる中間地点としても機能することでさらに活発に資源サイクルを発生させる可能性を秘めていると言える。ここで作り手として「建築サイクル」の可能性を、実証し、新たな価値の再分配を行うきっかけとなる地域の拠点として、まちや人々と建築のより良い関係を築く。



## 01. 問題提起：資源の単一的処理

「腐敗」に対して、生態学における「発酵」による物質への価値の再分配に着目し、建築の『発酵』へと読み替える。「資源」と「廃材」の境界を問い直し「建築サイクル」の可能性を探る。使い手だけでなく作り手も意識を変化させることが必要なこれからの社会で生きていく私たちにとって、建築の資源性に着目し、「建築サイクル」の可能性を探ることは重要な課題である。

「建築の『発酵』」を「既存建築の用途や機能を一度取り払い、モノとしての形状や素材、性能によって、新たな用途・機能を与えることで価値や可能性の再分配を行うこと」、「サイクル」を「不要になったものを再び生産・消費のプロセスへと戻すこと」と定義し、「建築の『発酵』」の概念をもとに、「建築サイクル」の可能性を実証し、新たな価値の再分配を行うきっかけとなる地域の拠点として、まちや人々と建築のより良い関係を築くことを目指す。

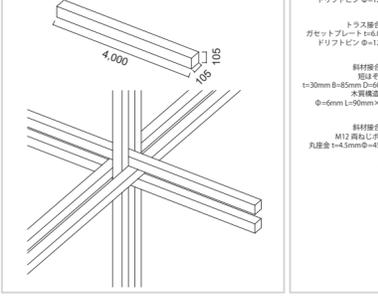


## 05. 建築的提案：建築サイクルを考慮した構法の提案

身近にアクセス可能な素材による空間や建築物の解体後の木材の資源性を考慮した構法を提案する。

古代の巨大建築物は、様々な使われ方を許容する空間と構造の「意味的分解」、部材の「物理的分解」と再構築されることでそれぞれサイクルが生み出され、「建築サイクル」がなされ身近にアクセスできる資源の『山』として再利用され、価値の再分配が行われてきた。またモジュールの統一による転用性、日常生活との密接性が重要である。建材のモジュール統一と解体や木材加工で発生した材長の短い木材で小断面の木材と短い材の組み合わせで長スパンを実現する架構を提案する。

### モジュール統一とはさみ柱、はさみ梁構法



### 長スパンを実現する木造トラス架構

